

少女は息を切らして駆けた。馬鹿なことをしたと後悔を胸一杯に、帰路を駆けた。

(ちよつとでもあんな奴を信じた私が馬鹿だったんだ……)

やがて肺が張り裂けそうになってようやく、リデルは足を止めた。後ろを振り返るが、後を追って来る気配はなかった。

後に続く道は、草木しかない長閑な風景だった。だいぶ小さくなったイエル村を横目に、リデルはとぼとぼと歩き出した。

全力疾走のし過ぎで、汗が滝のように流れ出していた。足が重く、頭がぼんやりした。そして気怠い様子で、流れた涙の後を丹念に拭き取った。漠然と、泣いた痕が目立たないから瞳が紅くて良かったと、少女はいつものように思う。

「早く、帰らなきゃ……」

もう会うこともないのだから気にすることは無い、と自分を慰めながらも、早く自分の場所に帰りたい。だが、今の状態で家に帰ることは出来なかった。

今帰れば、きっと父親が様子のおかしいことに気付かれてしまう。もし、理由を問い詰められでもしたら大変なことになるのだと、リデルには分かっていた。

頭に巻いた窮屈な布が、好きではなかった。父親の言い付けだから仕方なく守っているだけで、本当は今にも捨ててしまいたかった。

——その髪を決して他人に見せてはいけない。

少女が父親と交わした約束の一つだった。幼い頃、約束を破って外を出歩いていた時はひどく怒られたものだ。

見せれば悪いことが起こるのだと言われて育った少女は、自分が何か“悪いこと”をしてしまうのだと思っていた。

一昔前に、世の中には“呪い”という言葉があることを知って、自分がするのではなく、自分に掛かった“呪い”が何かをしてくすのだと、考え方を変えたが、それでも悪いことには変わらない。

イエル村の住人が自分を恐れ、嫌うのはきつとそのせいなのだと思っていた。

しかし、そんなものはないのだと、アランは言った。“呪いは現実を信じられなくなった者達の妄想なのだ”。

今も耳に残る低い声を振り払い、リデルは目的の地を目指した。

少女が目指したのは、誰の言葉に怯えることも、傷付くこともなく、誰の目を気にすることも無い。自分が自分らしくある——そんな場所だった。

景色は、なだらかな丘と低木から坂道と背の高い木々に変わりつつあった。イエル村のあった丘陵地帯の外れに差し掛かり、セントレーニア山の麓から広がった森との境界線に位置していた。

リデルは森を大きく迂回して作られている街道を外れ、林の中に入った。

そこは猟師でも知らないような獣道だった。視界は小枝や蜘蛛の巣なんかで塞がれ、足元は、石と落ち葉で出来たような地面だった。しかも水捌けが悪く滑り易くなって、おまけに段差もあった。

足元が急激に悪くなったのだが、リデルは平地と変りなく進んでいく。手馴れているというだけではなく、どこか活き活きとしていて、それこそ野生に還った獣のようであった。

やがて水の音が聞こえて来た。耳を澄ませば聞こえるような水の流れであったが、次第に大きくなり、視界が開けると同時に現れたのは、一筋の滝が流れる川であった。

滝壺はそれ程広くないが、代わりにかなりの深さを備えていた。水底まではつきりと見ることが出来るから、その深さが手に取るように分かった。溜息が出るような清流だった。

川べりに立つと、ひんやりとした空気が汗でべたつく身体に気持ち良かった。

少女は周囲を見渡して人の気配がないか確認すると、近くで水浴びをしていた三羽の小鳥達に向けて話し掛けた。

「誰か来たら教えてね」

小鳥達はすぐさま空へ飛び立ち、その場から離れて行った。

小鳥たちの姿を見送ると、リデルはおもむろに頭の髪留めを外した。ぐるぐる巻きの青い布が解け、中にきつく収めてあった髪がふわりと広がった。

炎のように明るい緋色の髪は、背中まで届きそうな程の長さがあった。しかも髪の根元から毛先まで、染めたように均等な色合いをしており、物珍しさに拍車をかけている。

次いでリデルはベスト、シャツ、ズボンと順に脱ぎ捨てた。最後に残った上下の下着も手際よく外すと、颯爽と清流の中に飛び込んだ。

瑞々しい肢体が、まるで若魚のように水の中を進む。勢いが衰える前に、蹴り足が水飛沫が上げ、滝壺に向けて進んだ。川の流れに逆らって進んでいるとは思えない滑らかさで進む。やがて、川の下る速度と拮抗したとき、リデルは大きく息継ぎをして、上半身を水中へ沈めた。波打つ水面を避けて、抵抗の少ない水の中をすいすいと進む。

随分と長いこと潜水していたリデルがようやく水面に顔を出したか。ところが、狙いを外したのか、滝の真下に頭を出してしまった。

頭上から降り注ぐ大量の水。外から見れば小さな滝であったが、近くで見れば、人間の小ささを実感してしまう程の高さから勢い良く落ちて来くる。

頭を出した途端に、激しく叩き付けられた。リデルは水の勢いに抵抗するように、水面から僅かに頭を出して、滝に打たれていた。

流れに身を任せれば、自然とかかわせるにも関わらず、立ち泳ぎでその場に留まっていたのだ。そこに辿り着くまでに無呼吸をしており、更に頭を抑えつけていた。下手をすれば、水を飲んでしまったり、まともに息が出来ず溺れてしまう可能性もあった。それでも、リデルは望んで滝に打たれ続けた。

やがて打ち付ける勢いに負けてしまったのか、水中に姿を消した。

その姿を見る者がいれば、溺れてしまったのだと慌てる頃だった。滝壺から数十メートル離れて流れが緩やかになっている所に、小さな影が浮かび上がって来た。

仰向けになったリデルは、水面から顔と胸と下腹部を出してプカプカと浮いていた。微かに波打つ水面に揺られ、リデルは空を眺めていた。

(……………雲だ)

蒼穹の空に高い雲を一つ見つけ、そんなことを漠然と思った。疲労感と酸欠のせいでそれ以上頭が働かなかつた。ちよつと気を抜くと、焦点を無くしてしまいそうになった。

ここで目を瞑り、そのまま水に沈むのも悪くないかも知れないと、現実感を失い掛けた瞬間、視界に三つの影が入って来た。

——三匹の小鳥だった。

小鳥達はリデルの頭上で輪を作つて旋回し、何かを伝えるように甲高い鳴き声を上げた。

その『声』を耳にした瞬間、リデルの双眸が力強い光を取り戻した。そうかと思えば、川岸に向けて猛然と泳ぎ出していった。

川から上がると、裸足のまま岩の上を走り、脱ぎ捨てた服を乱暴に掴んで、大きな岩の影まで走つた。ゴツゴツとした岩肌からリデルが顔を覗かせると、川の上では小鳥たちが未だに周り、叫び続けていた。

リデルは裸のまま、水滴も拭かずに隠れていた。それよりもっと別の事を警戒していた。隠れていたのだ。何かから隠れなくてはならなかつた。息を飲んで待ち構えていると、対岸から驚くものが姿を表した。

——豹だ。

豹の特徴である黒い斑模様の方が目立たない程、雪のように真っ白な毛皮を纏つた白雪豹だった。しかも大きさが並大抵ではない。

通常、豹は大きくと全長二mあれば大きな個体だが、この白雪豹は三mは超えていた。それでいてネコ科特有の歩行が、素早い動作を予感させた。どう猛な瞳の琥珀色が獲物を探して彷徨っており、その標的が今まさに、リデルへ定まろうとしていた、まさに緊張の一瞬であった。

何と、リデルの方から姿を晒してしまつた。岩陰から、裸のまま姿を晒した少女というのは、猛獣にとってどれ程恰好の獲物だろうか。

遠方からその姿を見つけた白雪豹は、嬉々として走つて来た。零状態から、一瞬にして最高速度になり、対岸の一際高かつた岩から、こちらに向けて地を蹴つた。

巨体が空を舞つた。その大きさからは想像も付かない跳躍力だった。水に身体を濡らすことなく着地し、そのままリデルに向けて猛然と迫つて来た。あまりにも素早い動きに、逃げる隙もなかつた。

そして、白雪豹の爪が届く距離になつた時だ。

「お座りっ！」

リデルはまるで飼い犬に命令するが如く、白雪豹に向けて命令した。

ズザザザザと、激しく地面を擦る音がしたかと思えば、目を疑うような光景が広がっていた。砂埃を纏つた巨大な豹が、裸の少女の前にちよこんと座っているではないか。舌を出して息を荒らげているその姿は、まさに扱いの如しである。

しかしながら、白雪豹の頭部の大きさは、少女より一回りは大きかつた。眼前にぶら下がっている犬歯は、リデルの親指よりも遥かに大きい。もし気まぐれを起こして、リデルの頭に喰らいついたら、まるごと飲み込まれそうな勢いである。

それでも少女は恐れた様子もなく、

「お前、来てくれたんだ……ありがとね」

少女が白雪豹スノーレパードの頭を優しく撫でた。撫でられた方は、琥珀色アンバーの双眸を三日月にして喜んだ。それどころか、顎下までくすぐられてると、気持よさげに喉を鳴らすのだ。

野性の象徴のような存在が、警戒心を持つどころか完全に甘えていた。人慣れなどしようもない、猛獣代表が形無しである。

そして白雪豹スノーレパードがリデルの方をじつと見つめ、寂しげに喉を鳴らす。

「……うん、私は元気だよ。心配してくれるんだね。お前は優しい子だね……貴方達もありがとう。もう大丈夫だから」

リデルはリデルで、まるで人と語り合うように応え、空に向けて感謝の言葉を告げた。

一度だけ、一際大きな鳴き声を上げると、鳥たちは山の中へ帰っていった。見送る白雪豹スノーレパードは喉を鳴らし、何か言いたげだ。

——クシユンツ。

獣達に続いて、リデルも鼻を鳴らした。いくら日差しが暑いとは言え、全身を濡らしたまま日陰にいては、身体を冷やしてしまう。少女は小さく笑い、服を着る事にした。

リデルは白雪豹スノーレパードという最強の護衛に見守られながら、脱ぎ散らかしたのとは反対の順番に身に付けていった。

流石にこれだけ長い髪だと短時間で乾かず、仕方無しに天日干しすることにした。丁度手頃な大きさの岩に腰掛けてみると、背中を鼻先で小突かれた。振り返ると、白雪豹スノーレパードがどっしりと横たわっていた。

白雪豹スノーレパードが横たわる、それだけで世界最高の即席ベッドが出来上がりだった。何と贅沢なベッドだろうか。豹の毛皮というだけで十分に高価であったが、稀少種である白雪豹スノーレパードの温もりを感じる事が出来るなど、どれだけ金貨を積み上げても叶うものではない。

リデルは遠慮しがちではあったが、その誘惑には抗えず、その身を埋めた。腹面は特に柔らかで真っ白な体毛で覆われており、顔を埋めても長過ぎず、それでいて短過ぎない絶妙な肌触りであった。

全身に広がる疲労感と暖かな毛皮に包まれると、すぐに眠気に襲われた。まだ帰ってやるべきことがあるはずだったが、今は何も考えられず只々、眠ってしまったかった。

「……ごめんね。ちよつとだけ寝かせて」

瞼を重くしたリデルが、白雪豹スノーレパードに謝った。白雪豹は特に何も言わず、大きな欠伸あくびを噛み殺し、猫のように身体を丸めて目を閉じた。

一人と一匹は、瞬く間に眠りに落ちて行った。

乾いた風を受けて少女の長い髪が乾き始めていた。真っ白な毛皮の上に広がり、太陽の光を受けた部分が、地の色よりも明るく、燃えるように赤く輝いているように見えた。

日が傾き出した頃、髪全体が日差しに照らされた少女は、まるで炎の中で眠る妖精のようであった。

少女は夢を見た。夢だと分かっている、醒めることのない夢だ。

夢の中で少女は殺された。何度も剣を突き立てられ、血が吹き出してもなお、斬り付けられた。

“止めてくれ”と叫んだ。“何も悪いことはしていない”、“こんなことは止めてくれ”と叫んだ。だが剣を振り下ろす手は止まることがなかった。

剣を振るうのは、いつも村人だった。顔は泥を被ったように歪んでいて、誰が誰か分からない。だが、これはイェル村の村人なのだと何故か分かっていた。

けれど、それが分かったところで、どうしようも無かった。自分の手は動かなかった。足も一歩も前へ出なかった。手足には何も縛り付けるものは付いていないのに、どういう訳か動かなかった。

まるで、話しに聞いた“呪い”だった。

人を縛り、人を殺す何か。

身体に住み着いたそいつが、自分の身体を縛り付けていて、自分は為す術もなく命を落とし、そして朽ち果てていく。そう思っただけで、震える程恐ろしかった。

——何で私が？

声を出すことが、少女に許された唯一の手段だった。だから、身体を貫く痛みも忘れて、得体の知れない“何か”を恐れ、そして不幸な己を嘆いた。そうすることでは、死んでいく自分を忘れる手段がなかった。

——何も悪いことなんかしていないのに。

憐憫れんびんは留まることを知らなかった。息が掠れ、村人の顔もぼやけて良く見えなくなってなおも続いた。

——死にたくない。

そう何度となく叫んだ。誰にも届かないと分かっている、叫ばずにはいられなかった。どうしても死にたくなかった。どうにかして生きたかった。

だから、今度は呪ったのだ。自分に掛かっていた呪いを吐き出した。言葉に乗せて、村人へ送り付けてやった。

——ざまあみろ。

もがき苦しむ村人を眺めながら、少女は確かにそう言った。今度は自分が味わった苦しみを与えてやる番なのだと、高らかにそう言った。

やがて、立っている者が誰もいなくなった。皆、死に絶えた。唯、自分だけが生きていた。他人を殺して、自分が生き残って——それだけだった。

他には何もない。虚しさの中で、ゆっくりと身体が腐っていくのを待っていた。肉が溶けて土となり、骨が崩れて風に舞った。それでも自分は消えなかった。

肉体が消えてなお、魂が縛り続けられた。土にも還らず、天にも召されないう、虚無にも成り得ない。何時までもこの場に縛られ、彷徨っていた。

自分は死んでなお苦しみ続ける呪いを掛けられ、永劫の時を繰り返すのだと思ったとき、力強い声が響いた。

——いいえ。それは間違いですよ、リデルさん。
ずっと、誰かに言っただけで欲しかった言葉だった。

——“呪い”とか“祟り”なんてものは、現実を信じられなくなった人達の妄想です。そんな面白い物なんて取るに足りません。

ずっと、誰かに否定して欲しかった言葉だ。誰でも良かった。そんなことはないのだと、信じさせて欲しかった。やつと叶ったというのに、全て自分が壊してしまった。全て自分のせいなのだ。自分が悪いのだ。それは分かっていた。分かっていた、言えなかった。たった一言が言えなかった。

最後の言葉を口にしようとしたとき、リデルは不意に目覚めた。頬を撫でる暖かなものに起こされたのだと、遅れて気が付いた。

気付けばまた泣いていた。伝う滴を拭き取ったのは、白雪豹スリーレバードの大きな舌だ。頬のベタ付きを拭き取りながら、リデルは笑った。

「またお前に助けて貰ったのね……今度は私から何かお礼をしなきゃ」

時間は時刻となっており、空の色は青から朱色に変わっていた。陽が沈む前に帰らなくてはならなかった。

すっかり乾いた髪を一つに纏め、藍色の大布をぐるぐる巻きにして、器用にピンで留めると、すっかり元に戻っていた。

激しい運動をして、最高級のベッドぐつすり寝たせいか、心が大分軽くなっていた。

「ねえ、お前は何かして欲しいことある？」

四足で悠然と佇む白雪豹スリーレバードに尋ねると、巨大な豹は迫力のある低い咆哮を上げた。

「……そっか。じゃあまた何か考えておいてね」

リデルの言葉を最後に、白雪豹スリーレバードは颯爽と立ち去っていった。来るときと同じく、猛烈な速度であった。

その姿が消えたのを見届けた少女は、一つの決意を胸に、家路を急ぐことにした。

陽が完全に落ちる直前に、リデルは家に辿り着くことが出来た。

山間に建てられた小さな家に、彼女とその父親の二人で住んでいた。家の近くに人気はなく、イエル村が最も近くの集落だった。

何かと不便だが、山で狩りをする人間であれば、それも致し方ないかも知れない。だが、少女の父親は猟師ではなかった。だから、少女は何故こんな所に住んでいるのか、未だにその理由を知らなかった。

森の中にひっそりと建てられた小屋は、日差しを遮られると一気に真っ暗となった。家には明かりが付いておらず、人の気配が感じられなかった。

少女は僅かに安心して、家の中に入ろうとした。鍵が掛かっていなかった。

貫木かんぎで止めただけの簡単な錠で、ちよつとしたコツを知っていれば簡単に空いてしまう仕組みだったが、外出する時は必ず掛けるようにしていたのだ。

「……お父さん、いるの？」

部屋の中は外よりも更に暗いが、耳を澄ませると人の寝息が聞こえて来た。目を凝らすと、暗闇の中、誰かが伏せているのが分かった。

(……また?)

天井から吊り下がった灯火具ランペンに火を入れると、頼りない光が室内を照らし、食卓のに突っ伏して寝ている男と、その横で並んで寝ている酒瓶を映し出した。

朝出た時にはなかった酒瓶が四本。普通の者でも一日で飲むには多過ぎる量だが、リデルの父は酒に弱く、とても飲めるような量ではなかった。

誰かとここで飲んでいたのでしたら、良かったのだが、リデルはここ数年——いや、もしかしたらもつと長いこと、この家を訪ねて来る人を見たことがなかった。

そして、ここ数カ月、父がまともに働いている姿を見たことがなかった。

一日で飲めない酒をあおり続け、次の日は酒精が抜けきらず寝っぱなしの生活が、ずっと続いていた。

リデルの家は、当たり前ではあるが、貴族でもなければ資産家でもない。犯罪者という訳でもなかったが、人一倍、汗水を垂らして働いて初めて人並みの生活が送れる程度の地位であった。工業化の遅れているクラムナートでは良くある“田舎の人間”であった。

酒にしる、女にしる、博打にしる、生活の足しにもならない事に傾けば、細々とやっていた家計はあつという間に火の車だ。

娘に黙って借金をこさえられては、たまったものではない。人買いがイェル村を物色しているという話しは聞いたことがなかったが、放っておけばそうなることは目に見えていた。

その事に気が付いたとき、リデルの役割は、家事と内職に山菜採りが加わっていた。他にもつと金になることがあればやったのだが、少女には大した学がなかった為、他に出来ることはなく、また、これといって思い付かなかった。

一度だけ、“この髪を切って売ろう”と父親に持ち掛けた事があった。大きな街では、かつらを被る習慣があつて、女の髪が売れるのだと聞いたことがあつたからだ。

長くて色の美しい髪ほど人気が高いらしく、その金額を聞いて驚いたものだった。

“自分の髪は長くて珍しいから高く売れるはずだ”と子供ながらに喜んだのだが、淡い期待に反して、父親からは怒鳴り声しか返って来なかった。

都市へ出稼ぎに出ることも考え時期もあつたが、“伝手つての無い若い女の行き着く先は、娼館か奴隷市場だ”と宿の主人マスターから、あの厳つい顔で脅され、気持ちが悪えてしまった。

それに、飲酒依存症アルコール中の父の酒代を稼ぐ為に働くのだと思うと、どうにもやり切れなかった。幸い、山菜採りの才能はあつた。村長も言っていたが、評判は悪くない。いや、粗を探そうにも、非の打ち所がなかった。

貴重な山菜も簡単に見つけ来ては、村人を訝しがらせたものだ。それに、誰も教えていないのに、毒を持ったものを卸したことがなかった。村人達は不思議に思い、誰から教わったのか尋ねたが、“山の住人が教えてくれる”と、要領のない答えを返しては、嘔吐き扱いされるだけだった。

「お父さん、起きて……こんな所で寝てたら、風邪引いちゃうよ……」

リデルが父親の背中をさするのだが、何か寝言のようなことを言うだけで、起きる気配がなかった。だが放っておくことも出来ず、繰り返し揺したところでようやく、自分の娘の存在に気が付いた。

「……リデルか。どこをふらついていた」

「別にふらついてなんか……」

日がな一日飲んでくれている自分のことを棚に上げて、父はリデルを責めた。

「なら、どこかで色男でも掴まえたか？ ……はっ、お盛んなことだな」

掃き溜めから、汚れきった言葉を投げつけた。酔っている時は口汚くなるが、今日は特に荒れていた。相手が酔っているのだと分かっているにもかかわらず、看過出来そうになかった。

リデルが反論しようと口を開いた時だ、

「銀髪の大男だつてな……村長が言っていたぞ」

——おじゃべりな老人め。

自分には口止めておいて、裏では村の口軽女達ババアと同じか。リデルは直接手が出せなかった分まで、胸の内ではひどい悪態を付いた。

村長にしてみれば、単に事実を言っただけで何も含むところがなかったとしても、だ。そこで何か悪いことを父に吹き込んだのだと、邪推せずにはいられなかった。

「……あんな奴、ぶん殴つてやっただけよ」

リデルは乾いた笑いを浮かべ、夕飯の支度に入った。昼間は代金を受け取ったのに、あんなことになってしまって、何も仕入れていなかった。

リデルはあの時のことを思い出して、無性に腹立たしくなったが、怒りは長続きせず、すぐに悲しくなった。疲れてぐっすり寝たら忘れるものだと、がむしゃらに泳いでみたのが、思いの外、心の角に引っ掛かっているらしかった。

「有り合わせで何か作るから待ってて」

そのことから目を逸らすように、包丁を握り、棚に置いていたジャガイモに手を伸ばした。

「……お前、その男に何か喋つたのか？」

——ガタン、とジャガイモが地面に落ちた。リデルが掴み損ねたのだ。

何事もなかったかのように、ゆっくりと拾い上げたが、その表情には動揺が滲んでいるのが分かった。隠し事をするには向いていなかった。

ただ、天井から吊り下がった灯火具ランプだけの部屋の中は暗く、離れて二人の距離は空いていた。しかも、父はリデルを見ようとしたかもしれない——にも関わらずだ、

「何故話した！他人には話すなとあれだけ言っているだろうが!!」

突如として少女の父親は激昂し、食卓を激しく叩き付けた。その衝撃で、もともと傾いていた面の上を酒瓶が転がり、地面に落ちて砕けた。

——ガシャン、と音を立てて壊れたのは、何も酒瓶だけではなかった。

「お前は自分の事を何も話すんじゃない！誰が相手でもだ！いいな！」

リデルがまだ何も話していないというのに責め立てられた。“何か事情があった”とか、“仕方なかった”とかいう子供じみた言い訳の入る隙間すらない、あまりにも一方的な言い方であった。

(……まだ何も言っていないのに!!)

確かに話してしまった事はあった。しかし、何もかも話してしまった訳でない。自分が抱えているものの大きさからすれば、何十、何百分の一に過ぎなかった。それでもここまで怒られなければならぬ悔しさに、リデルは奥歯をきつく噛み締めた。

「私だって……好きでこんなところに生まれて来た訳じゃ、ない」

「……………何だと?」

「こんなおかしな色に好きでなつて訳じゃない!」

今まで話せずに溜め込んでいた不満が、堰を切ったように溢れでた。

「こんな仕打ちをされてるのだって、全部、お父さんのせいじゃない!」

「もう一度言ってみろ……」

父は立ち上がって凄んだ。しかし、リデルも怯まなかった。

「村で誰かが言ってたわ。私がこんな目にあつてるのは、お父さんのせいだって!」

リデルに向けて、ずかずかと歩き出していた。料理包丁を手にしたまま、興奮する姿も目に入っていなかった。

「お父さんが昔、女の人を匿ったからだって! 私を身籠っていたその女のせいだって!」

——瞬間、父の平手が、娘の頬を思いつき張り飛ばしていた。

リデルは勢いでバランスを崩し、調理台に手を付いた。頭が揺れたせいで、痛みが遅れてやってきた。左頬のジクジクとした痛みと、左手の甲の焼けるような痛みだ。バランスを崩した時に、握っていた包丁が反対の手を傷付けていたのだった。

大粒の涙が流れ出た。それでもリデルは父を睨み付けた。火勢を思わせる緋色の瞳が、怒りと悲しみをぶつけていた。

「……何で私だけが皆と違うの? 何で私だけこんな目に合うの!?!」

父は何も言わなかった。唯、黙ってリデルを見下ろしていた。

——何も言わない。

娘に叩き込んで来たことそのものが、娘の問いに対する回答でもあった。

だが、リデルはそれでやり切れるような状態ではなかった。我慢ならなかった。自分の境遇も、こんな仕打ちも、何もかも。

気付けば、少女は家を飛び出していた。包丁を投げ捨て、切った手もそのままに、窮屈で息苦しい場所から逃げ出した。

父親は、消えていくその後ろ姿を眺めているだけであった。何もせず、暗澹とした顔で見送っていた。

森の暗闇の中へ消えてしまった後は、ふらふらとした足取りで食卓に戻り、再び酒瓶を手に取り、一言だけ呟き、残り少なくなつた中身を一気に呷った。

「何で私だけ……か」

一言だけ呟き、残り少なくなつた中身を一気に呷った。